

伊豆のなまこ壁建造物群と清水瓦

はじめに

網 伸 也

伊豆は海と山の国である。半島全域にわたって海岸線には切りだつた山肌が迫り、相模灘や駿河湾に流れこむ河川沿いに狭隘な平野部が広がる。その河口は太平洋の荒波を避ける入り江となり、小さいながら数多くの良港が点在している。たとえば、駿河湾フェリーで清水港から西伊豆の土肥港へ向かうと、港に迫る山の岩肌が圧倒的スケールで我々を迎えてくれるし、伊豆急行からみる東伊豆海岸では、山際の平野部に密集して営まれる人々の暮らしを垣間見ることができると。また、下田街道（天城街道）や松崎街道など、山間部を縦横断する陸路を通れば、そこには海岸部とはまったく異なつた山を生業とする集落が多く形成されている。

このように海と山の風土を合わせ持つ伊豆は、古より独自の文化圏を形成していた。とくに、人々と海とのかかわりは古くから密接で、下田市三穂ヶ崎の岩場における古墳時代後期の石製玉類の出土や、南伊豆町の日野遺跡での奈良三彩小壺蓋の出土は、航海の安全を神に祈る海上交通の祭祀と関係がある。『日本書紀』などに伊豆が配流地として「伊豆嶋」と記載されるのも、峻嶒な山々によつて内陸部と遮断された伊豆と海との関係を示すものである（網 一九八七）。

また、『扶桑略記』天武天皇九年（六八〇）七月条に「駿河二郡を別けて伊豆國となす」とあり、伊豆は早くか

ら一国として独立したことを示す。『扶桑略記』の記述がどこまで正しいのか確かめる術はないが、平城京・二条大路出土木簡などから奈良時代の伊豆国は田方・賀茂・那賀の三郡のみで形成されていた（奈良国立文化財研究所一九九〇）。伊豆諸郡からは調として「堅魚」が多量に進上されており、近現代まで盛んに行われていた鰯漁と時代を超えて結びつく。

南伊豆における鰯漁は前近代から盛んで、大正年間には鰯の漁獲高は收穫量・代価ともに最高であった。とくに、特産品として鰯節が多く製造され、伊豆節として土佐節と並ぶ名声を得ていたという。ちなみに、明治四四年の鰯節の製造総額は三三八、七・四円と、他の水産加工品と比較して群を抜いていた（賀茂郡教育會 一九一四）。そして、鰯漁を中心に漁港として栄えた下田や松崎には、町の繁栄を示すいわゆる「なまこ壁」造りの棧瓦葺き建造物が多く残されている。その美しい町並みは、現在では人々の旅愁を誘う重要な伝統的建造物群を形成しており、それぞれの自治体で町並み保存と活用事業が進められつつある（松崎町教育委員会 二〇〇二a・静岡県下田市教育委員会 二〇一三）。

ただ、なまこ壁の建造物群を有形文化財と考えるうえで、個々の建物を構成する重要な属性である棧瓦となまこ壁⁽¹⁾瓦の流通の問題を明らかにする必要がある。たとえば、なまこ壁と並び防火建築材として多く利用された有名な伊豆石については、下田旧市街地建造物群の調査で石材の産出地が明らかにされるなど、半島内各地での産出・流通が想定できるが、伊豆半島における瓦生産は一部を除いてほとんど行われておらず、他地域から多量の瓦を海運によって運び込まなければならない。本稿では、下田と松崎のなまこ壁建造物群に使用された瓦類と漆喰に焦点をあてて調査を行い、聞き取り調査も交えて伊豆半島における瓦の流通の実態を明らかにしたいと考える。なお、本稿は平成二五年（二〇一三）一〇月三〇日より十一月五日まで行った、伊豆下田・松崎と静岡・清水地域の現地調査に基づいている。

一 旧岩科学学校舎と清水瓦

松崎町は西伊豆の駿河湾に面した拠点的な港町として知られている。豊富な漁獲量だけでなく、明治時代以降には養蚕業や木炭生産も盛んに行われ、とくに養蚕業は近代的な工場制工業を導入して良質な生糸を生産し、松崎での初取引の値段は関東や東北地方の繭相場の標準となり「松崎相場」と呼ばれるほどであった。また、木炭生産も地場産業で随一の地位を保ち、昭和二〇年代に生産量のピークを迎えたという（松崎町教育委員会 二〇〇五）。町の繁栄はこれらの産業を基盤とし、多くのなまこ壁の商家や民家などが建てられたと考えられる。

今回の現地調査では、まずこの松崎町の調査に入った。その理由は、伊豆半島における瓦の生産と流通を考えるうえで、松崎町に所在する旧岩科学学校舎の資料が非常に重要だと考えたためである。

旧岩科学学校舎は、明治一二年（一八七九）に着工、翌年の九月に竣工した明治期を代表する学校建築である。バルコニーなど洋風を取り入れながらも、明治初期の学校建築では和風要素が多い建物として知られている。木造棧瓦葺きで、二階寄棟造り主屋の正面中央に唐破風造りの玄関を設け、平屋入母屋造りの副舎を両側に配する。建物基礎には伊豆石の切石を二段に積み、副舎外壁の漆喰塗り込めと腰なまこ壁の調和が美しい。玄関ポーチ二階には、三条実美が筆をとった「岩科学学校 明治己卯夏日 実美書」の扁額が掲げられている。

二階西端は十八畳敷きの和室となっており、小壁全面に鍍絵の名工として名高い入江長八の千羽鶴の作品があることから鶴の間とよばれる。長八による千羽鶴の鍍絵は圧巻で、多くの鶴たちが東の空から上下・左右に分



図1 旧岩科学学校「鶴の間」

かれて西の夕日に向かって飛んでいく（日比野秀男二〇一二）。これは鶴に例えた生徒たちが、明日に向かって飛び立つ様子を描いているという。また、壁絵の松葉模様は手書きではなくスタンプであることが修理で判明し、建設当初の色彩が見事によみがえっていた（図一）。二階バルコニーは狭く機能的でなく、洋風建築様式を和建築に導入したときの不自然さを残すものである。

旧岩科学学校校舎は、平成二年から二年あまりかけて解体修理が行われている。その時、屋根から降ろされた玄関ポーチ唐破風大棟の鬼瓦の上端に「静岡縣下 駿河國有度郡 渋川村渡邊千代松作」の篋書きが施されていることが判明したので（図2・3）。また、両副舎大棟の鬼瓦上端にも「渡邊千代」の篋書きが認められ、軒棧瓦の平文様部上縁と棧瓦端面には「ギ洩」の押印が施されものが発見された（松崎町 一九九三）。報告によれば、ここにある「渡邊」は清水市の金左衛門商店であり、当時は清水瓦と呼ばれ巴川南岸の渋川に多くの瓦生産の作業場をもっていたという。

ところで、これまで近世から近代にかけての瓦生産地を考えるうえで、軒平瓦と軒棧瓦の瓦当文様の系統分類が重視されてきた。とくに、金子智氏は江戸遺跡から出土する軒平瓦・軒棧瓦の唐草文様を三つの系統に分類し、A

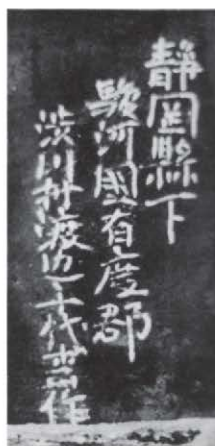


図3 唐破風大棟鬼瓦の篋書き

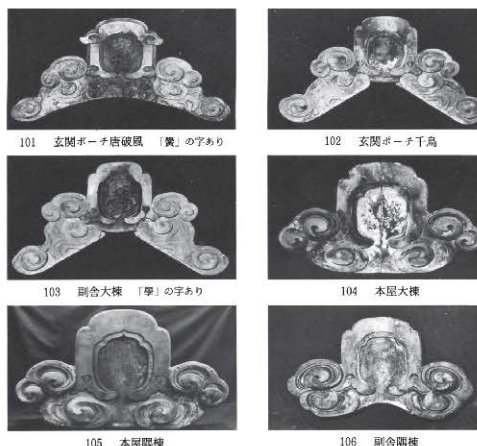


図2 旧岩科学学校校舎鬼瓦

査は、創建当時に校舎の屋根を葺いた瓦が清水で生産された瓦であったことを明らかにするとともに、伊豆半島において清水瓦が広く流通していた可能性を示唆したのである。ちなみに、建物の裏手に修理のときに下ろさ

種を「江戸式」(江戸近隣の関東圏のみに分布し、他地域での分布が見られない)、B種を「大阪式」(本来の生産地と推定される京阪神地域以外にも広く分布が見られる)、C種を「東海式」(名古屋近隣が生産地として推定されるが、関東地域にも分布が見られる)と整理した(図4)。そして、一九世紀以降には東海地域での瓦生産が活発化し、「三州瓦」として全国展開する様相を明らかにしている(金子 一九九六)。

旧岩科学校校舎の軒棧瓦の唐草文様は、金子氏が分類するところのC種「東海式」がほとんどであり、中心子葉が二葉の独自な文様をもつものもある(図5)。他地域のなまこ壁建造物群にも同種の「東海式」軒棧瓦が葺かれていることから、近代における伊豆半島での瓦の流通は三州瓦が主体であったと考えられてきた。しかし、旧岩科学校校舎の解体修理調

A 種「江戸式」



B 種「大阪式」



C 種「東海式」

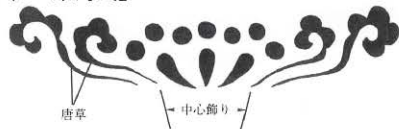


図4 金子智氏による軒棧瓦分類

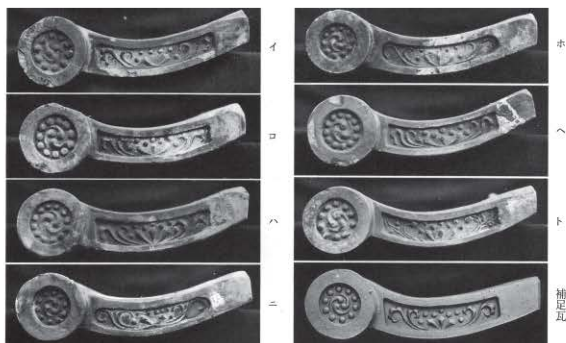


図5 旧岩科学校校舎軒棧瓦

れた軒棧瓦が保存されており、補修用の軒棧瓦を手にとって観察できた。文様構成は清水瓦と同じであるが、燻しの状況などは創建軒棧瓦とは異なっており、凸面に「三州 高浜 野安製」の押印がある。校舎の創建時は清水瓦であるが、後の補修瓦としては三州瓦を使用していたと考えられる。後述する聞き取り調査でもわかるように、松崎においては後に清水瓦と三州瓦が拮抗していた様子がうかがえる。

さらに、創建当時の瓦がすべて清水瓦である事実は、なまこ壁瓦も清水産である可能性が高いことを示している。今回の現地調査で、旧岩科学学校校舎に展示している刻印瓦となまこ壁瓦を観察したが、文様構成は三州瓦とほとんど同じであり、屋根に葺かれたとき押印がなければ三州瓦と区別ができないほどであった。また、なまこ壁瓦は、四隅に釘穴を施すのではなく各辺中央に釘穴があり、木釘が釘穴に残っている。表面調整は丁寧で面取りを施すのに対し、裏面はナデが雑で壁地に固着させるための漆喰が付着する。漆喰目地の形状は中央が膨らんだお洒落なものであるが、その基準線は墨打ちによって仮の直線を朱線でひき、それをもとにフリーハンドによって墨で曲線基準線を施している(図6)。ちなみに、旧岩科学学校校舎のなまこ壁瓦は金子智氏の分類によれば、釘穴を辺中央に穿つ第3形態で一七世紀後半から一八世紀前半に出現するという(金子 一九九九)。

なお、旧岩科学学校校舎と同じ渡邊千代松の篋書きは、静岡市内に所在する臨濟寺御本堂の大棟鬼瓦にも残っており、御本堂が棧瓦葺きに改修された明治二〇年のものである(松崎町 一九九三・重要文化財臨濟寺本堂修理委員会 一九九四)。臨濟寺は今川義元が、父氏親の建立した善得寺を天文五年(一五三六)に禅宗寺院として改名し



図6 旧岩科学学校なまこ壁瓦

た寺院で、徳川家康によって再建され江戸時代を通じて幕府から篤い援助をうけた古刹である。本堂は慶長一四年（二六〇九）から元和二年（二一六）までの間に完成した方丈型式の建物で、現在重要文化財に指定されている。このような駿府の古刹の大修理にも清水瓦渡邊金左衛門の千代松が関わっており、当時の清水瓦がいかに繁栄し、当地域の瓦の生産流通を担っていたかがわかる。以下に、報告書に掲載された箋書き銘を示しておく。

△臨濟寺本堂大棟鬼瓦の箋書き1▽

静岡 下駿河国

有渡郡渋川村

製造人渡邊金左衛門

明治貳拾年

未六月

△臨濟寺本堂大棟鬼瓦の箋書き2▽

明治貳拾年

未六月

製造人

駿州有渡郡渋川村

瓦屋渡邊金左衛門

同苗千代松作之

二 松崎町における瓦流通の実態と漆喰の調達

― 左官職人の聞き取り調査から見えてくるもの ―

旧岩科学校校舎における調査の後、松崎町在住の左官職人から興味深いお話をうかがった。聞き取り調査の日は、平成二五年一〇月三一日である。

まず、松崎町岩科山口区に在住の左官職人佐藤勉氏（大正一五年生まれ）宅を訪問し、昭和初期（戦時中）の瓦や左官材料である漆喰の調達状況をお聞きした。

屋根瓦の固定やなまこ壁に使用する漆喰の材料については、松崎の業者（宮内商店など）から取り寄せていた。宮内商店は現在も浜近くの商店街で金物店を営んでいる。漆喰灰はほとんどが石灰で、福島県（いわき）から取り寄せていたと聞いている。貝灰も地元では生産しておらず、沼津あたりから取り寄せていた。若いころ、横浜で修業していた時に貝灰をよく使っていた。貝灰は扱いがいいが、値が高く松崎ではあまり使わなかった。定着剤のツノマタは仙台のものがよく、地元のツノマタは弱い。

瓦は、三州瓦はあまり使わず、清水瓦と呼んでいた瓦を昭和八年から一〇年ころ買付けに行った記憶がある。うる覚えだが、川沿い（静岡市清水区を流れる巴川）に工場が並んでいた。伊豆にはよく、望月三蔵商店が船で営業し瓦を売りにきていた。私は三河の瓦より、お得意先の清水瓦を多く使った。裏の普音寺も昭和八年に清水瓦で葺いている（図7）。地元で生産された笠野瓦や天神瓦（天神原で製造）も覚えているが、砂が悪くて使えなかった。これらの地元の瓦は、左官職人が補修瓦として作った瓦で、広く流通しなかった。松崎地域で使用された瓦は、三州瓦と清水瓦が半々くらいではないか。なお、三州瓦と清水瓦は鬼瓦をみればわかる。ガンブリ・カタ・アシの形



図7 普音寺本堂

をよく真似て書いていた。また、下り棟のカザキリは棧瓦の上に漆喰をしつかり置いて溝を作り、上に丸瓦を固定させないといけない。土で固定したものは手抜きで、後から草が生えてくるのですぐわかる。

山口地区の大火事については覚えていないが、父親の小さいころ（日露戦争ころ？）にあつたと聞いている。昔はみんな貧しくて土蔵の壁も粗土壁だった。財をなして少しずつ中塗りを施したり、上塗りを施したりしていた。なまこ壁は財がないとできない。

佐藤氏のアトリエには、伊豆の左官職人らしく自作の見事な竜などの鍔絵が所狭しと置かれていた。いくつになっても腕を磨き続ける職人の魂を垣間見た気がした。なお、沼津あたりから取り寄せたという貝灰については、清水の織戸（折戸）村で「白灰屋」が江戸時代におこり、織戸では製塩とともに重要な産業だったことを、静岡市文化財課の渡邊康弘氏にお教えいただいた。渡邊氏によれば文政三年（一八二〇）の『駿河記』に「織戸村に白灰屋有り、牡蠣及び白海石を焼きて白灰と為す。白壁の具なり。古来故ありて國中一家の白灰師となるなり」とあり、駿河はもちろん海路によって品川・江戸にも送られ白壁の材料となったという。これら駿河湾沿岸部の「白灰」生産は昭和の初めから戦中くらいまでは行われていたとのことで、沼津と清水で場所は若干異なるが佐藤氏の話を裏付けるものである。

次に、松崎町道部在住の左官職人山本堀一氏（昭和三年生まれ）を訪ね、聞き取り調査を行った。

まず、漆喰の仕入れであるが、やはり宮内商店など地元業者から取り寄せていた。貝灰は伸びがいいのほとんど壁の仕上げに使っていた。屋根漆喰では貝灰は弱いため使えない。地元では貝灰の生産は行っておらず、すべて取り寄せものである。清水の貝灰はあまり聞かない。そのほかは石灰であるが、産地はわからない。定着剤のツノマタは、北朝鮮・北海道・三陸海岸のものが良質で、一年から二年寝かせればその中でもいいノリか悪いノリかわかる。灰とツノマタの配合は固定できない。ノリの質によってできる量が異なってくるからだ。地元のツノマタ

は、東海岸産はまだ使えるが、西海岸産は粘りがなく水っぽい仕上がりとになり使えない。

瓦は清水を多く扱っていたが、三州から清水経由で入ってきたものもある。三州瓦は粘りがあって使いやすかったが、清水瓦は割れやすい感じでよくない。どちらのものか触ったらすぐわかる。古い家で使っているのは三州瓦が多く、新しい家は清水瓦ではないか。

山本氏の話は、貝灰や漆喰の定着剤であるツノマタについては佐藤氏と共通したところが多くみられたが、瓦の仕入れ先については若干認識が異なっていた。これは佐藤氏の話にあったように、主とした取引先との関係の違いによるものと考えられる。山本氏のアトリエでも鍛絵を製作中で、左官職人の気迫を十分感じさせる空間だった。

二人の左官職人のお話を聞くと、かなりの量の清水瓦が松崎に入っていたことがわかる。とくに、佐藤氏の話では清水瓦の特徴は鬼瓦をみればすぐにわかるということで、清水瓦の流通を確認する資料として旧岩科学校校舎の鬼瓦の型式が重要になることが判明した。これらの視点は、今後の伝統的建造物群の調査に大いに役立つと思われる。ちなみに、佐藤氏や山本氏が取引していた宮内商店は、現在も向浜の商店街で宮内金物店として営業されているが、おじいさんが亡くなり代替わりして昔のことはわからないとのことであった。

三 松崎町のなまこ壁建造物群と保存への取り組み

左官職人の聞き取り調査をもとに、実際に松崎のなまこ壁建造物群を実地調査してみた。松崎でも安政元年（一八五四）の東海巨大地震による津波の被害が大きく、約三メートルの津波が押し寄せて家屋田畑を潰し、浸水家屋



図8 伊豆文郎なまこ壁土蔵

は三四〇戸余にのぼったという（松崎町教育委員会 二〇〇五）。現在みられるなまこ壁建造物群の町並みは、明治期以降に整えられたものと考えられる。

まず、明治四三年に建てられたと伝える『伊豆文邸』の見学。呉服商が営まれた建物で、正面の土間と帳場にその面影が残る。下から上までなまこ壁の見事な建物である。裏に建てられた二棟の土蔵（図8）では、なまこ壁瓦を一般的に「四半目地」壁とするが部分的に平行貼りの「馬乗目地」にしており、断面L字形の特注瓦で雨よけを作るなど、面白い意匠がみられる。土蔵の正面や目に付く場所は丁寧ななまこ壁で仕上げるが、建物間の隙間のなまこ壁は漆喰の塗りが粗い。左官職人山本堪一氏の話によれば、表は腕のたつ職人が担当し、建物内部などみえないところは弟子が練習もかねて行うという。技術伝承の見事なリレーである。この『伊豆文邸』では、後述するように「松崎蔵つくり隊」が、古来の工法によって戦後はじめてなまこ壁の修復を行っている。

また、同じく呉服商家として建てられた『中瀬邸』と、那賀川沿いの『するがや』・『はまみせ』の建物調査を行う。『中瀬邸』は明治二〇年に建てられたもので、母屋の東西両脇に蔵を配する（図9）。外面のなまこ壁が美しく、母屋の西側の蔵の入口にみられる



図9 『中瀬邸』全景



図10 『中瀬邸』黒磨きなまこ壁

黒磨きのなまこ壁は左官職人の仕事としても最高の技術がないとできないという（図10）。建物内には左官道具とともに、「仁義禮智信一闕」と箆書きを施したなまこ壁瓦が展示されており、釘穴はやはり各辺中央に開けられていた（図11）。『するがや』では寄棟作りの細長い建物のカザキリが、屋根の両端でなく中央に漆喰によって二本固定されているのを確認する。カザキリが強い西風から屋根瓦のまくりを防ぐために作られたことを再認識できた（図12）。『はまみせ』の蔵は昭和三年に近くで火災が発生し、隣接する民家八棟が被災した時も、母屋は焼失したが蔵は焼け残っており、なまこ壁が火災に強いことを証明したという（図13）。

このほか、江奈地区の屋号『おりや』の母屋と蔵、『喜八丸』の母屋などを調査した。『おりや』の母屋のなまこ壁瓦には割り付けの朱線がよく残っていた。また、土壁造りの民家も屋根は漆喰で固められており、西風の強さを



図11 『中瀬邸』展示なまこ壁瓦



図12 『するがや』寄棟建物のカザキリ



図13 『はまみせ』なまこ壁土蔵

暗示する。これら多くの古民家の屋根瓦も観察したが、軒棧瓦は「東海式」であることは間違いないが、清水瓦か三州瓦か外部観察だけで確定するのは難しい(図14・15)。ただ、印象的にはかなりの量の清水瓦が使用されていると思われる。

ここで、松崎町が取り組んでいる「なまこ壁の土蔵づくりプロジェクト事業」について紹介しておきたい。松崎町での本格的な土蔵づくりは、七〇年ほど前に行われて以来、久しく実施されておらず、左官職人でもなまこ壁づくりの全工程を経験する機会がなくなっていた。そこで、『伊豆文邸』が平成一七年に町へ寄贈されたのを契機に、『伊豆文邸』のなまこ壁の修復を計画し、観光協会や左官組合の協議のもと「松崎蔵づくり隊」によって翌年一〇月から約半年をかけてなまこ壁の修復が行われた。作業は、竹切り・土づくり・木舞かき・竹釘作り・荒うち・中塗り・瓦張り・なまこ施工と、なまこ壁づくりの全工程をカヴァーし、県内外の左官職人や地元のプロランティアが多数参加している。そして、この修復作業の経験を生かし、平成二〇年度から伊豆の長八美術館前の町有地においてなまこ壁土蔵『夢の蔵』の新築を行ったのである。このように町が主体となつて実施した「なまこ壁技術伝承事業」は、若い左官職人の技



図14 『中瀬邸』軒棧瓦



図15 『伊豆文邸』軒棧瓦

術伝承だけでなく、松崎町が全国に誇る文化遺産に地域住民が直接触れて理解を深めるとともに、観光面でもおおいに活用されている。地域の文化遺産への自治体の取り組みとして、非常に有益な事業であったといえる。

この「なまこ壁技術伝承事業」に直接かかわってこられた松崎町役場企画観光課の山本公氏と財団法人松崎町振興公社の鈴木誠氏を訪問し、松崎のなまこ壁について、いろいろ貴重な経験談をご教示いただいた⁽²⁾。

なまこ壁の土蔵づくりプロジェクト事業での所見では、粗塗り壁の上に粗い中塗りを施し、その上になまこ壁瓦を漆喰塊で貼り付け、四隅を木釘で固定した。なまこ壁をはがした旧土蔵では、なまこ壁瓦の接着はスサ入り粘土で行っていたという。また、漆喰は現在の左官屋さんが取引している栃木県から石灰を購入し、ツノマタを煮てドロドロにした定着材にスサ（麻の繊維）を混ぜ、石灰をこねて自分たちで製作した。中塗り用の砂漆喰は定着剤の中に細かい砂を入れている。漆喰の製作工程は素人には大変な作業であったが、職人さんは難なく行っていた。左官屋さんから聞いた話によれば、ツノマタは寒い場所とれたもののほうが、粘りがあつてよい。ちなみに、入江長八の鰻絵の顔料調達は、地元の葉間屋が岩絵具を調達していたとのことである。

なまこ壁の製作工程は、なまこ壁瓦を張り付けた後に目地を漆喰で埋め、漆喰の幅を墨打ちで付けて漆喰を盛っていく。漆喰の盛り上げは一回だけでは乾かないため、少なくとも三回に分けて行う必要がある。重ねて塗っていく漆喰は砂漆喰で、仕上げにきめ細かい上塗り用漆喰を用いる。昔はいくつかの土蔵を一度に工事していたため、乾くまで手間ができないようにローテーションを組んでいたらしい。

なお、復原土蔵で再利用するために、解体した古民家から譲り受けた瓦は三州瓦とのことであった。また、石部から山口に越える田代峠付近の笠野で、石部の左官山本八郎が「白土瓦」を製造していた。潮風にも強いというところで職人を連れてきて瓦生産を行っていたが、広くは流通せず石部集落の周辺で使用されたようである（松崎町教育委員会 二〇〇二b）。今は「白土瓦」を載せた建物は残されておらず、サンプルとして保存している棧瓦を見

せていただいた。

なまこ壁の由来については、安政大津波の影響もあるだろうが、現実的には強い西風に煽られて大火事がしばしば発生したため、耐火のために普及したと考えられる。山口地区や船田地区のように、山間部でのなまこ壁の普及が大火事の後に広まっていくことから、下田より若干遅れて防火対策としてなまこ壁が普及したようである。なまこ壁の普及は、明治に入り製糸や炭作りによる町の振興を基盤に、西風の強い風土に対応した防火対策のための建物を作っていたと考えるのが妥当である。

四 旧下田町のなまこ壁建造物群

下田は伊豆半島の最先端、江戸と上方を結ぶ海上交通の要衝として栄えた港町である。稲生沢川の河口に形成された下田港は、潮流の激しい相模灘沖合において須崎半島と城山・赤根島に囲まれた風待港あるいは避難港として古くより重要視されていた。江戸幕府の開府にともない海防の拠点として下田奉行が設置され、御番所を中心に現在の町並みの基盤が形成されたという。その後、御番所は浦賀に移されたが、嘉永六年（一八五三）のペリー来航によって状況は大きく変換していく。翌年ペリーが再来航し、三月に日米和親条約が締結されて下田が開港したことはあまりに有名である。

ただ、現在の町並みが形成されたのは、安政の大津波によって町が壊滅的ダメージを受けて以後のことである。安政大地震による津波は、下田港内の柿崎で六・四メートル、対岸の下田でも四・四六・八メートルの高さの津波が押し寄せたと推測されており、九八四軒のうち九三七軒が流出し、一二二人の溺死者を出したという（羽島一九八四）。その後、開港場であることから復興のために多額の拝借金が投入され、遅々とはあるが現在みられるような町並みが整えられていった。

なまこ壁建物については、大津波以前にも存在していたようであるが、現在残っているなまこ壁建造物群は、そのほとんどが明治期以降の産業発展によって街の近代化が進んでから建てられたと考えられる（静岡県下田市教育委員会 二〇一三）。松崎町でも同じであったが、なまこ壁建物はある程度の財がないと建てられなかった。その利点は、やはり強い海風による火災から財を守る耐火構造にあったのは間違いない、蓮台寺集落でも豪農の土蔵にはなまこ壁が使われている。また、松崎街道沿いの山間の集落でも、母屋には使われないが土蔵になまこ壁を使っている宅地が多くみられる（図16）。現在では、なまこ壁土蔵を改修して住居としている事例が多い。このような山中にも、なまこ壁の土蔵がある理由として、土蔵が富の象徴となりなまこ壁となっている可能性がある。ただ、沿岸部とは異なり海風の影響がないため、屋根漆喰は大棟や下り棟を除いて使わないようである。

なまこ壁建造物群をはじめとする、下田の古民家に流通している瓦は三州瓦が主体と考えられてきた。明治三二年竣工の下田小学校校舎は、残念ながら昭和四一年に解体されてしまったが、木造棧瓦葺きで二階寄棟造り主屋の両側に平屋入母屋造りの副舎を配する旧岩科学校校舎と類似した近代学校建築で、建物外壁全面になまこ壁が施されていた。なまこ壁の費用はかなり高価であり、近代における下田の発展を示すに十分であるが、この校舎に使用されていた瓦は三河から運んだとされる（加藤角一 一九五八）。最近では、瓦問屋としても活動していた『土藤商店』（図17）に残された『瓦類出入帳』や『瓦類当座帳』など、明治四〇年から四三年、大正元年から三年、大正七年から一〇年の瓦類の取引に関する記録の分析から、三州瓦を取り寄せて南伊豆一带に販路をもっていたことが



図 16 松崎街道沿いのなまこ壁建物

伊豆のなまこ壁建造物群と清水瓦

判明している（静岡県下田市教育委員会 二〇一三）。ただ、松崎での瓦流通の実態を考えると、下田でも三州瓦だけでなく清水瓦が広く普及していた可能性がある。

これらの問題意識のもとに、下田でなまこ壁建造物群を外部から観察してみた。まず、須崎町に所在する『雑忠』（鈴木忠吉家住宅）と石原家住宅を観察。石原家住宅は明治初期に建立された伝承がある二階奇棟造り建物で、なまこ壁と屋根漆喰の純白が美しい（図18）。『雑忠』の母屋は安政以降の建築、石原家住宅は明治時代初期のものとして伝承されている。『雑忠』のなまこ壁瓦は、釘穴が四隅であることを確認した。屋根瓦はともに典型的な「東海式」軒桟瓦であるが、三州瓦か清水瓦かは判断できない。中原町に入り、



図17 『土藤商店』全景



図18 石原家住宅全景



図19 『山佐商店』全景



図20 『山佐商店』なまこ壁

『山佐商店』(山下家住宅)を観察。ここでは北側の建物を解体しており、側面のなまこ壁がよく観察できた(図19・20)。なまこ壁瓦は四隅釘穴で、四辺に漆喰定着のために掻き破りが確認できる。裏地の粗壁は薄く、ところどころ穴があいて竹組がみえるほどである。平成元年に補修したようで、下地補修のコンクリートに「平成元年七月 左官内野満」との篋書きがあった。建物は明治期と推定されている。

原町にはいり、『旧松本旅館』(松本家住宅)を観察。なまこ壁瓦はやはり四隅釘穴である。伝承では、母屋は安政二年(一八五五)、蔵と離れは明治八年(一八七五)に建てられたとされる。明治二六年の銅版画として『旅舎松本卯之助』が残されており、建物群の由来を知ることができる。軒棧瓦は中心飾りの中央付近から唐草が派生する雑忠などでみられるタイプと、中心飾りの下から唐草が派生するタイプが使用されている(図21)。前者と同じタイプの「東海式」軒棧瓦は、松崎の『中瀬邸』でも確認している。

大工町に入り、『土藤商店』(金澤家住宅)を観察。伝承では明治二〇年(一八八七)の建物群で、前述したように明治四〇年から大正一〇年の『瓦類出入帳』・『瓦類当座帳』などから三州瓦との取引があったことが判明している。『土藤商店』の蔵の二件南隣になまこ壁建物が残っており、なまこ壁瓦に四隅釘穴を確認する。次に、浅岡家

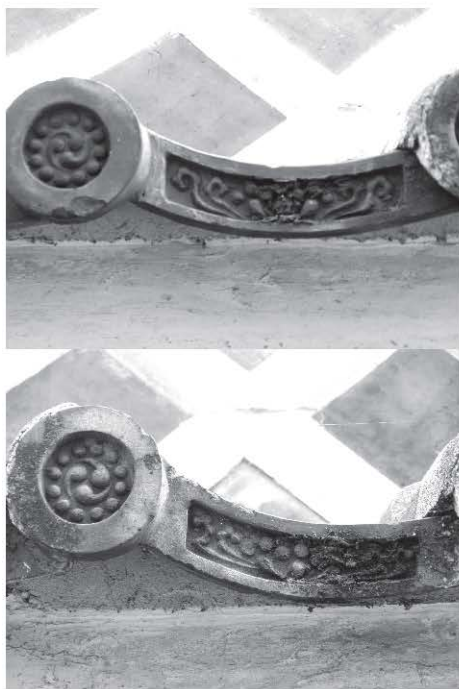


図21 『旧松本旅館』軒棧瓦

住宅の蔵を観察。このなまこ壁瓦は四隅釘穴と四辺中央釘穴が混在していた(図22)。また、『山佐商店』と同様に下地の粗土壁は非常に薄い。伝承では安政以降の建物である。

このほか、坂下町の『旧ハリス邸』・『日待蔵』・旧沢村家住宅、七軒町の安政元年に建てられたとの伝承がある『土佐屋』(図23)、弥治川町の『平野屋』、二丁目の明治四〇年ころに建てられた櫛田家住宅蔵などを観察し

た。これらの建物群の屋根に残された古い軒棧瓦も、『雑忠』と類似した「東海式」であった。外観調査の所見では、軒棧瓦をみるとすべて三州瓦系の「東海式」であり、なまこ壁瓦は四隅釘穴が非常に多い。清水産なまこ壁瓦の特徴の一つとして松崎の旧岩科学学校舎などで確認できた四辺中央釘穴があげられるのであれば、同型式のなまこ壁瓦は下田では浅岡家住宅でしか確認できず、清水瓦の流通の少なさを示すものかもしれない。ただ、後述する聞き取り調査からわかるように、清水瓦が下田でも流通していたことは間違いなく、それらの実態を明らかにすることが今後の課題となる。



図22 浅岡家住宅なまこ壁



図23 『土佐屋』全景

五 駿河から伊豆に流通した清水瓦

以上のなまこ壁建造物群の調査で、瓦生産がほとんど行われなかった伊豆半島においては、海運を利用して三州瓦とともに清水瓦が多く流通していた状況が判明した。最後に今まであまり知られていなかった清水瓦の実態について迫ってみたい。

静岡県清水区興津に清見寺という古刹がある(図24)。東海道をおさえる要衝地に建立された寺院で、一〇世紀

半ばには東国に対する清見関の関寺として機能していたと伝えられる。寺伝によれば、鎌倉時代中ごろに関聖上人が禅寺として再興し、足利尊氏の崇敬も篤く室町幕府によって駿河国の利生塔が設置された。戦国期には交通の要衝にあるため、たびたび陣となつて戦禍を被つたが、江戸時代には徳川家の帰依を受けて伽藍が整えられ現在にいたっている。大方丈の庭園は江戸時代初期の山水庭園で、家康によって駿府城より庭石を運ばせて築庭させたと伝える国指定名勝の名庭であり(図25)、朝鮮通信使が来朝時に参詣する寺院としても知られる。

平成一五年から一六年にかけて本堂の保存修理工事が実施され、棧瓦凸面に「文政十一年五月一日 御瓦用方老万五千枚 駿州大谷村瓦常八」と篋書きされた資料や、端面に「大谷常」と刻印された棧瓦が発見された(宗教法人清見寺 二〇〇五)。これらの資料から、少なくとも文政十一年(一八二八)には駿河において瓦生産が行われ



図24 清見寺全景



図25 清見寺方丈庭園

ていたことがわかる(図26)。瓦生産が行われた大谷村は有度山丘陵西麓に位置し、古代には駿河国分寺の有力な想定地である片山廃寺に瓦を供給した宮川瓦窯群が操業された場所でもある(平野 一九九〇)。おそらく、これら良質な粘土と大谷川の水運を利用して、大谷村で江戸時代後期に瓦生産が盛んに行われたと考えられる。

一方、日本平東の清水区に展開した清水瓦は、巴川流域の良質な粘土を利用して瓦生産を行ったもので、駿府城築城のうちに三河の職人がこの地域に移住してきて、燻し瓦を製造しはじめたのが始まりだと伝えられている(島田市博物館 二〇〇六)。大谷での瓦生産と清水瓦との関係は明らかでないが、記録のうえでは大谷での生産が早く、後述する聞き取り調査でも大谷から清水へ瓦生産の拠点が移ったことが語られている。清水瓦が「東海式」軒棧瓦で、三州瓦と見分けがつけにくいのも、三河からの職人の移動を考えれば納得がいく。

実際に清見寺の屋根に現存する近代

の軒棧瓦をみると、松崎旧岩科学校と共通するもの(報告書に掲載されたイ型式・ヘ型式か)が多くみられた。この型式の瓦は山門や築地で間近で観察でき、胎土や焼成などから清水瓦である可能性が高い。ただ、裏に積まれていた補足用の棧瓦に「静岡縣引太郎 西濱名村下尾奈 角谷□(幸力) 次郎」の押印が認められた(図27)。これら補足用瓦は胎土・焼成などから新

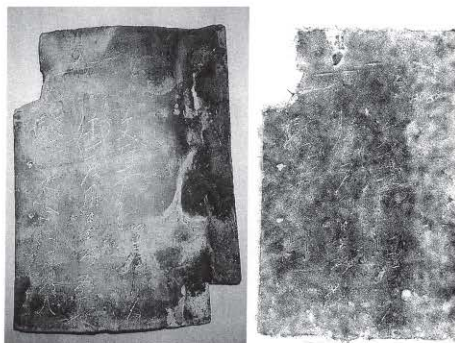


図 26 清見寺本堂篋書き棧瓦



図 27 補足用棧瓦押印

しい時代のものと考えられ、後には湖西からも補足瓦が運ばれたようである。

清見寺における明治期の屋根補修については、明治二年と明治一年に行われた明治天皇の行幸との関係が考えられる。また、大正天皇が東宮時代に海水浴に訪れており、清見寺門前の海へ向かう道に「大正天皇在東宮海水浴御成道」の石碑が建てられていた。その側面に「明治二十二年七月二十日

四週間 明治二十三年七月二十七日 三週間」と刻まれている(図28)。明治二〇年には渡邊千代松が臨濟寺の本堂の修理瓦を納めており、年代が近接することは示唆的である。

清見寺のほかには清水瓦の流通を確認するため、清水の古い街並みや周辺の古建築も観察していった。まず、次郎長商店街に向かい、旧民家の調査を行う。次郎長商店街の入り口にある近代の邸宅の屋根に、清見寺と同じ軒棧瓦が葺かれているのを確認した。現在は医院を開業されているようであるが、蔵をもつかなりの豪商の邸宅である。この母屋の屋根には屋根漆喰を多く使って瓦を固定しており、伊豆との共通性も認められた。次に、清水次郎長生家を訪れた(図29)。長屋形式の邸宅で実家は米問屋を営んでいたという。次郎長の生家かどうかは別にして、旧来の姿をよく留めており、屋根も明治期から大正期の軒棧瓦がよく残っていた。その文様を見ると、やはり清見寺



図 28 大正天皇海水浴御成道石碑



図 29 清水次郎長生家全景

との共通性が認められる(図30)。

静岡・清水地区のなまこ壁建物についても調査を行うために、瀬名の郷倉の調査にもむかった。現在の建物は天保四年(一八三三)に建て替えられたといわれ、壁の腰から下になまこ壁が採用されていた(図31)。屋根瓦は清見寺で確認した軒棧瓦がほとんどで、やはり清水瓦と考えられる。建物の裏に回つてみると、漆喰地がはがれた場所があり、ここではなまこ壁瓦が四隅釘穴であることを確認した。この建物はもともと約一〇〇メートル南の暗小路にあつたが、昭和一五年に現在地に移築したとのことで、そのときになまこ壁瓦が替えられた可能性もある。

さらに、広く駿河湾周辺地域の実態を明らかにするため、なまこ壁建造物が分布する東海道宿場町の蒲原宿と由比宿の調査を行った。

蒲原宿では佐藤家住宅(図32)と吉

田家住宅ではお住まいのかたからお話を伺うことができた。その話によれば、建物は明治二〇年ころに建てられたもので、昭和のはじめに修理しているとのことである。また、他の家はわからないが、修理のときに清水瓦を使ったとのことであつた。現在の屋根はまんじゅう瓦であるが、吉田家住宅の対面の板壁住宅『ふとん しまづ

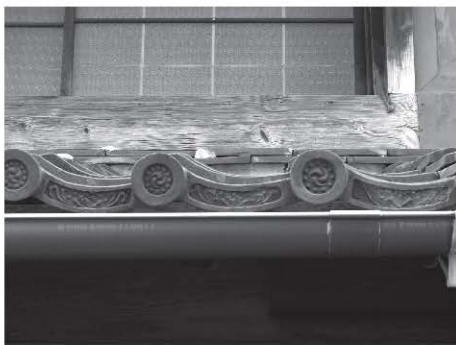


図30 清水次郎長生家軒棧瓦



図31 瀬名の郷倉

や」の屋根には清水瓦と考えられる近代軒棧瓦が載っていた。本陣跡佐藤家住宅にも清水瓦の軒棧瓦が観察でき、清水瓦が広くこの地域に出荷されていたことを裏付けている。

なまこ壁瓦については、吉田家住宅では上端の三角なまこ壁瓦に辺中央の釘穴が観察でき、木釘の残闕も残っていた(図33)。また、東海道町民生活歴史館がおかれている『志田邸』に對面する旧家を見ると、裏の土蔵の上窓

両脇がなまこ壁となっており、なまこ壁瓦の釘穴がやはり各辺中央に施されていることを確認した(図34)。そして、由比宿に残る『小池邸』まで足を運んでみると、建物入口横の壁がなまこ壁となっており、なまこ壁瓦がここでも各辺中央釘穴であることを確認。これらの資料から、清水瓦で生産したなまこ壁瓦の一部は、やはり釘穴が各辺中央にあげられていた可能性が高いと考えられる。この事実は旧岩科学校の資料とも符合し、非常に興味深い観察結果である。

以上のように、寺院と周辺の旧家屋根瓦に強い共通性があり、なおかつなまこ壁瓦の所見を考えると、清水瓦が近代初期においてかなり広域に流通していたことを十分窺える結果となった。



図 32 蒲原宿佐藤家住宅と旧東海道



図 33 蒲原宿吉田家住宅なまこ壁

六 清水瓦生産の聞き取り調査

静岡市文化財課の渡邊康弘氏の紹介で、清水瓦の渡邊金左衛門商店の関係者から貴重なお話をうかがうことができた。清水瓦の実態を知るうえで重要な証言でありここに記録しておく。

まず、清水区高橋南に所在する有限会社渡邊瓦工事を訪問し、渡邊千代松の末裔である渡邊達雄氏（昭和一〇年生まれ）からお話を聞いた。聞き取り調査の日時は、平成二五年一月四日である。

以前は金左衛門商店として巴川の南、渋川の地周辺で家内工業的に達磨窯での瓦生産を行っていた。この地域で生産された瓦を清水瓦とよんでいた。瓦生産の最盛期は昭和三〇年前後で、近隣に一〇八件の瓦屋があった。その中でも、金左衛門商店と望月三蔵商店が大きく、うちの親戚が営む瓦屋も四件あった。

金左衛門商店は私の代でも職人を三〇人から四〇人抱えており、昭和三四年の伊勢湾台風ときには復興のために岐阜県と愛知県に一日トラック一〇台の瓦を出して、岐阜県庁からは感謝状をもらっている。ほかに、金左衛門商店の仕事として、仙台パークホテルの建設に携わり清水瓦を出荷し、静岡県庁本館の建設では尾張（三州）に特注の塩焼瓦を発注して屋根工事を行っている（図35）。塩焼瓦は三州瓦しか生産できない赤茶色の瓦で、やや焼き歪みがあつて行儀が悪いが、寒さに強く丈夫である。

昔から三州とつながりがあつた。清水瓦の由来も、三州から職人が江戸に近い駿府に入ってきて、生産が始まったのではないか。古くはお寺の過去帳で天保一五年（一八四四）にみえるから、江戸時代後期には清水瓦の生産が始まっていたことがわかる。明治には西伊豆の旧岩科学校だけでな



図 34 蒲原宿土蔵なまこ壁

く静岡の臨濟寺にも金左衛門商店の千代松が瓦を入れていたことがわかってるし、清見寺の瓦も清水瓦だと思う。渡邊千代松は祖父にあたるのではないか。清見寺の西浜名村の遠州瓦は新しい段階になって入ってきたと思う。

粘土の採掘は、巴川沿いの北脇新田や能島の田んぼで行っていた。長崎付近で発見されたという粘土採掘穴も一連のものであろう。焼成は達磨窯を作ってやっていた。金左衛門商店は倉庫を巴町にもっており、ここに焼き上げた瓦を集積して、清水港から出荷していた。出荷は地元や西伊豆が多かったが、下田も含めた伊豆平島一円に広く船で出荷していた。巴川沿いの粘土がなくなり、日本平近くの山（静岡市大谷）で粘土採掘を行っていたが、日本平が昭和三〇年ころに観光百選や国の名勝に選ばれて、道路からの景観に悪いということで粘土採掘がだめになった。さらに、大量に生産できるトンネル窯の普及で、清水瓦は昭和四〇年代に衰退した。現在ではどこも瓦生産はやっていない。望月三蔵商店も瓦施工はやっているが、生産はしていない。

なまこ壁瓦については、生産していた記憶はない。釘穴の位置もわからない。清水瓦が伊豆に多く出荷されているので、注文があれば生産していたかもしれない。そもそもなまこ壁瓦は敷瓦と同じような作りであり、生産は簡単にできたのではないか。また、瓦を伊豆に出荷するにあたって、三州から取り寄せて出荷したことはない。清水で焼いた瓦を出荷していた。漆喰は石灰を仕入れて使っていた。貝灰は聞かない。ツノマタを煮た後に植物繊維のツタをいれ、石灰を混ぜて漆喰をつくっていた。

渡邊氏の話は、清水瓦の隆盛とその衰退過程を知るうえで、非常に貴重



図 35 静岡県庁本館

な話であった。清水で瓦を多く生産していた事実はあまり知られておらず、十年もすれば誰もわからなくなるのではと危惧されていたのが印象的であった。また、長崎付近で発見された粘土採掘穴というのは、巴川上流の長崎において過去に試掘調査を行った文化財課の渡邊康弘氏のご教示を受けてのことである。渡邊康弘氏によれば、直径五メートル、深さ二メートルほどの近代の円形土坑を確認したが、近代の瓦工場の土取り穴ではなかったかと指摘されていた。この地域は巴川の形成した水性粘土が砂層と互層になって堆積しており、採掘した粘土は水簸して使用していた可能性がある。

次に、同じく金左衛門商店と関係の深い、藤枝市平島に所在する『西瓦』株式会社渡邊商店を訪問し、渡邊隆之氏（昭和二十七年生まれ）より話を伺う。『西瓦』渡邊商店は現在、寺社仏閣を中心に瓦葺き施工を精力的に行っており、代表取締役をつとめる渡邊隆之氏は文化財修理に造詣の深いかたである。聞き取り調査の日時は、平成二十五年一月五日である。

株式会社渡邊商店（屋号『西瓦』）は、藤枝に移る前は巴川北岸の江尻台町で『平』瓦第三工場として換業していた渡邊武雄氏の末弟にあたる渡邊好夫氏が創立し、隆之氏が引き継いだ。もともと清水の西原で商売を始めたことから、屋号がマルニシとついた。清水の金左衛門商店は渡邊瓦の本店であり、兄弟・息子たちに窯を持たせて巴川沿いに渋川・能島・北矢部（第二工場）・江尻台町（第三工場）など工場を幾つも持っていた。これらの工場で生産した瓦を本店に集積し、駿河・伊豆地域だけでなく東京など広く出荷していた。達雄氏は販売・屋根工事を担当した家で、『平』金左衛門の名を継いだ。東京の高円寺にも『平』渡邊商店があり、東京での営業を主に担当していた。隆之氏も子供のころ、トラックに乗せられて東京に行った記憶がある。達雄氏は追分で操業していた望月三蔵商店と対抗して伊豆への進出を行っていたが、二〇年ほど前に本店である金左衛門商店はなくなってしまう。

金左衛門商店の瓦生産は、渡邊万太郎氏が本家筋である。隆之氏の祖父渡邊銀蔵氏も万太郎氏の兄弟で、千代松は万太郎の父にあたるところ。なお、万太郎氏の弟子にはいった鬼板師の大橋誠一（大橋景月）氏は、芝増上寺や千葉法華経寺の鬼瓦をはじめ、多くの寺院や旅館・邸宅などの仕事をを行い、昭和六二年には勲七等青色桐葉章を受けている（図36）。大橋氏は森田三津蔵から漆喰浮彫の指導を受け、日本画も柳田華紅から学んでおり、伊豆の仕事も多く受け持っていた。大橋氏は金左衛門商店を代表する鬼師だったが、平成五年に九一歳で亡くなった。

また、現在の引掛棧瓦は明治の初めに工部省営繕課によつて考案されたとされるが、明治八年に渡邊金左衛門の手によつて初めて製作され、臨濟寺の渡り廊下で使用されたものだ。この引掛棧瓦を考案発注したのは臨濟寺の和尚という。大正一二年の大震災で脱落防止の効力が認められた引掛棧瓦は、大正一五年に日本標準規格瓦となる。東京に市場をもつ金左衛門商店の引掛棧瓦が日本標準規格瓦となったのは、渡邊万太郎氏の兄弟で国会議員をつとめた杉山徳次郎氏の力添えであった。三州の引掛棧瓦は、昭和十三年以降に政府の補助を受けて市場を広めていった。

清水瓦の由来は、大谷での生産がはじまりである。大谷でも瓦生産が行われており、大谷川を下つて出荷していた。清見寺から文政一一年の大谷村産棧瓦の篋書きがみつかり、これが清水瓦の源流だと思う。大谷には窯師もいて、達磨窯の築造や補修を行っていた。明治時代となり民家などに広く瓦が普及したため、清水に産地を移して大々的に瓦生産が始まったのではないか。金左衛門商店もそのときに立ち上がったのだろう。もともとは、駿府城築城のうちに三州から瓦職人が移住し、巴川沿いの良質な粘土を使って燻し瓦を生産したのが始まりとも言われている。一時は三州瓦を上回る生産量を誇っていたが、昭和三十一年から三二年ころは生産がどん底になっていた。また、煤煙公害で達磨窯生産が認められなくなり、昭和四九年の清水七夕豪雨で巴川が氾濫し、達磨窯が水浸したことで生産廃業となった。三州のトンネル窯による大量生産の影響も大きかったと思う。

旧岩科学校の篋書きに千代松の名がみえるように、伊豆には清水瓦が多く出荷されている。金左衛門商店は、西伊豆はもとより、東伊豆の下田にも船で運んだ。下田の瓦がすべて三州瓦というのはありえない。伊豆大島にも清水瓦を運んでいる。三州瓦は主に新しくなつてから普及しているのではない。ただ、なまこ壁瓦の生産はあまり聞かない。敷瓦と同じなので注文を受けて生産していたと思う。釘穴の位置もわからないが、各辺中央にあけるのは分割に際して合理的だと思う。また、静岡や清水の近代瓦はほとんどが清水瓦である。三州から運んだ瓦は赤い塩焼瓦だけだ。これは三州でしか焼けない。現在では三州でも手に入らなくなつて、清水の塩焼瓦を使った近代遺産の修理ができない状況だ。清水瓦は燻の黒がいい。三州より上だと思う。ちなみに、鬼瓦製作で奈良瓦との交流もある。

渡邊商店には、大橋誠一氏が残された鬼瓦の下絵や金左衛門商店関係の資料が多く保管されており、これらの資料を分析すれば清水瓦について詳細にわかるであろう。とくに、大橋誠一氏による鬼瓦の緻密な下絵は見事で、時代性を反映して新聞紙などに描かれた下絵も多く残されていた。先の渡邊達雄氏から伺った話と合わせて、『西瓦』渡邊商店での聞き取り調査によつて、近代静岡を代表する地場産業の一つで

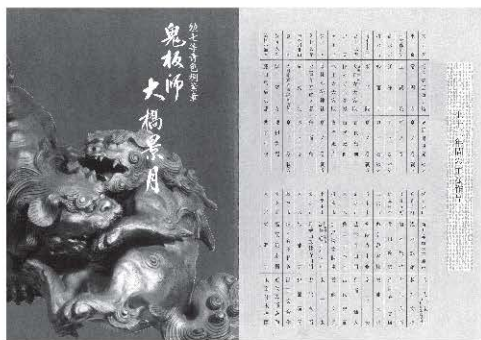
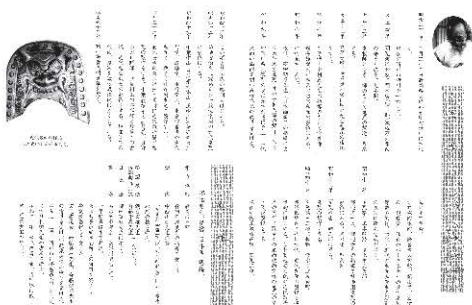


図 36 大橋景月資料-1



大橋景月資料-2

あつた清水瓦の実態をかなり明らかにできたといえる。

おわりに

最初に述べたように、伊豆は海と山の国である。とくに、東と西をつなぐ海路の中継地としての重要性は古来より変わらない。

そのような地理的環境において、東海岸南端の下田は江戸（東京）、西伊豆の松崎は駿河との関係が深かったことは容易に想像がつく。なかでも下田は、日米和親条約による開港をうけて諸外国の人々との関係を深め、安政の大津波後の復興では江戸幕府の威信をかけて町並みが復興されたという。下田の町の復興と近代化のなかで、和風建築の美的景観だけでなく、強い海風による大火防止のためにも、瓦葺きなまこ壁建物が多く建てられた。現存するなまこ壁建造物群の多くが安政年間以降の建築と推定されており、なまこ壁建造物群は下田の近代における繁栄を象徴的に示す記念物だったといえる。

このような伝統的建造物群に暮かれた棧瓦や、外壁を美しいなまこ壁で彩った瓦は当然三州から船で運ばれたと考えられてきた。実際に『土藤商店』に残された瓦の帳簿類をみると、三州瓦との取引が多かったことは間違いないであろう。しかし、下田と同じように、近代化の中でなまこ壁建造物による町並みが形成された松崎では、様相がまったく異なっていたことが今回の調査で判明した。つまり、松崎のなまこ壁建造物群を支えた瓦は三州ではなく、清水瓦だったのである。それは、旧岩科学校校舎の瓦に残された「渡邊千代松」のヘラ書きが雄弁にものごとく語り、松崎の左官職人や清水瓦の末裔のかたがたの証言からも十分うかがえるであろう。

われわれは、近現代の瓦生産や流通を考えると、瓦生産地の一大拠点として三州瓦の存在を大きく考える。もちろん、三州瓦が瓦の生産・流通に果たした役割は非常に大きい。しかし、近代の静岡県下では清水瓦だけでは

く、島田の伊太瓦や初倉瓦、磐田・袋井を中心とする遠州瓦など、三州瓦の影響を受けて多くの瓦生産が行われていたことが判明している（島田市博物館 二〇〇六）。これら地域の近代化をささえた地場産業は、今や忘れ去られてようとしているのが実態ではなからうか。

われわれ現代産業の基盤をもう一度見つめなおし、より豊かな地域史像を描いていくためにも、これら忘れ去れていく地場産業の消長を明らかにし、次世代に語り継いでいくことは非常に重要なことである。そのような意味において、この清水瓦に関するささやかな記録が何らか役に立つのであれば望外の幸せである。

なお、本稿をまとめるにあたり、静岡市生活文化局文化スポーツ部文化財課の渡邊康弘氏、松崎町企画観光課の山本公氏、財団法人松崎町振興公社の鈴木誠氏、下田市教育委員会生涯学習課の増山順一郎氏、高浜市やきもの里かわら美術館の金子智氏に多大なご教示をいただいた。ここに感謝の意を表する次第である。

注

1 なまこ壁に使用される瓦の名称について近世には「腰瓦」「豎瓦」などと呼ばれ、海鼠壁に使用されるため「海鼠瓦」とも称されるが、本稿では用途を明確にするため「なまこ壁瓦」に統一している。

2 なまこ壁の土蔵づくりプロジェクト事業の詳細についても、両氏より資料の提供をうけ概要を説明していただいた。また、松崎在住の左官職人の紹介や、復元したなまこ壁土蔵に案内していただき、建築工程でわかったことなどを実地でも解説していただいた。

参考文献

網伸也 一九八七『日野遺跡出土の奈良三彩小壺蓋について』『日野遺跡発掘調査報告書』南伊豆町教育委員会

- 加藤角一 一九五八「下田小学校と下田の町屋」『芝浦工業大学研究報告』五
- 金子智 一九九六「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第一〇一号
- 金子智 一九九九「江戸遺跡出土資料に見る近世海鼠瓦の諸様相」『古代』第一〇六号
- 永岡治 一九八六『目でみる西伊豆の歴史―戸田村・土肥村・賀茂村・西伊豆町・松崎町―』
- 羽島徳太郎 一九八四「関東・伊豆東部沿岸における宝永・安政東海津波の挙動」『地震研究所彙報』五九
- 日比野秀男 二〇一二「伊豆の長八」伊豆の長八・駿府の鶴堂く漆喰鍍絵天下の名工く財団法人静岡県文化財団
- 平野吾郎 一九九〇「宮川瓦窯跡 歴史時代（奈良・平安）」『静岡県史資料編二 考古』
- 賀茂郡教育會 一九一四『南豆風土誌』
- 静岡県下田市教育委員会 二〇一三『下田市旧下田町伝統的建造物群保存対策調査報告書』
- 島田市博物館 二〇〇六『第三九回企画展 島田瓦物語』
- 下田市教育委員会 一九八八『図説下田市史』
- 宗教法人清見寺 二〇〇五『史跡朝鮮通信使遺跡興津清見寺境内 清見寺本堂保存修理工事報告書』
- 重要文化財臨濟寺本堂修理委員会 一九九四『重要文化財臨濟寺本堂修理工事報告書』
- 奈良国立文化財研究所 一九九〇『平城宮発掘調査出土木簡概報（二十三）―二条大路木簡一―』
- 松崎町 一九九三『重要文化財旧岩科学校校舎修理工事報告書』
- 松崎町教育委員会 二〇〇二a『松崎町海鼠壁のある建物（海鼠壁調査報告書）』
- 松崎町教育委員会 二〇〇二b『松崎町史資料編第四集 民俗編（上巻）』
- 松崎町教育委員会 二〇〇五『松崎町史・通史編』